

## 97 《巖窟の聖母》・謎解きの出発点

絶対にレオナルド真筆ではない《ルーブル版》

2024

真鍋友範

### 1 始めに

《巖窟の聖母》は、なぜ2枚存在するのか、また、どちらが先に描かれたのか、という謎を解明しようとしたことに、研究の出発点があった。

2017年の段階には、《岩窟の聖母・ルーブル版》とは、デッサン技能の劣る作品であるという結論の発見からスタートしたのを覚えている。

ルネサンス時は、工房で作品が作られた場合、例え弟子が深く関与していても、師匠の名前で世に出るのが通常であった。

例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチの師匠ヴェロッキオの工房で制作されていれば、師匠が殆ど描いていない《キリストの洗礼》を、弟子の描画担当者の名前を出すことなく、すべてヴェロッキオ作《キリストの洗礼》であったのだ。

この例からも示されるが、例えレオナルド・ダ・ヴィンチが描いたものではなく、工房の弟子たちが描いた作品であっても、社会に出される時は、レオナルド・ダ・ヴィンチ作品だ。

《巖窟の聖母》は、ロンドン版、ルーブル版の2枚が存在するが、デッサン技能が相当劣っているのが、ルーブル版だ。\*小生ネット論文《巖窟の聖母》2017

同時代に描かれた作品とされるのに、その作品の個性が、全く別人のように異なる点に注目する必要がある。

例えば、カラヴァッジョが描いた《メデューサ》の作品では、改めて注文に応じて2枚目の作品が描かれたのだが、その溢れ出る個性は。カラヴァッジョのものであると確信が持てるほどだ。

しかし、《岩窟の聖母・ルーブル版》は、違う。レオナルド・ダ・ヴィンチの弟子が描いたとすれば、第1作である《岩窟の聖母・ロンドン版》を手本にして、弟子たちが描けた時期を類推することが可能だ。

大事な2作が描けた時期は、レオナルド・ダ・ヴィンチが、ミラノを逃れ、マ

ントヴァに向かった時期以降であり、アンブロジーオ兄弟がルイ 12 世に対し仲裁を申し出た時期から、裁判が結審した 1506 年までの期間と考えるのが妥当だ。

なぜなら、レオナルド・ダ・ヴィンチはミラノ不在で、しかも第一作であるレオナルド作のロンドン版は、そのままミラノに残されていたのだ。

だが、【なぜ、第 2 作が描かれたという謎】を解く資料は残されていない。そこで、仮説を一つ提示し、問題解決に向けて推察することにする。

アンブロジーオ兄弟からの制作代金支払いの裁判申し立てに対し、【ルイ 12 世が、解決に向かう行動を起こした、という仮説】だ。

その根拠はある。当時はすでにレオナルドの名声はヨーロッパ中に轟いていたと考えられる。諸侯は当然レオナルドの作品を手に入れたいと願っていただろう。

ルイ 12 世が、仮に、レオナルドの作品を手に入れたかったなら、絶好のタイミングが目の前にあった時期だ。

《聖母無現在御宿り信心会》から受取拒否されたレオナルドの第 1 作を、代替作品との引き換えに、受け取れば入手可能なのだ。

ルイ 12 世は、誰かに《巖窟の聖母》の代替作品を描かせれば、夢は実現できるのだ。

このような内面的動機がルイ 12 世の脳裏に浮かんだなら、あとは、実行のみであった筈だ。

都合の良いことに、ミラノには、レオナルドの残した工房と、弟子たち、そして受取拒否の第 1 作があるのだ。

それを見本にもう一つ作品を描かせれば、夢工作は実現する。

そうして、描かれたのが、代替作《巖窟の聖母・ルーブル版》だった。

ところが、問題が発生したに違いない。

代替策は、ルイ 12 世の好みからか、内容が【キリストの洗礼】場面であった。特徴は、底辺部が水辺であること、また、幼児イエスが、同じく幼児姿の洗礼者

ヨハネから洗礼を受けている情景として描かれている。

【大問題は、新約聖書のこの場面には、聖母は登場しないことだ。】

であるにも関わらず、キリストの洗礼場面なのだから、当然信心会からは、  
しても受取拒否の対応があったことは間違いないのだ。

また、レオナルド・ダ・ヴィンチ自身が、このような代替作品を描くはずもなく、また、イエスが入れ代わった作品を認める道理も存在しない。

ルイ12世としては、残念ながら積極的に解決に関与したにも関わらず、手元に代替作が残り、結局時間を経て、ルーブル美術館に移される結果に終わったと考えるのが、自然だろう。

《ルーブル版・岩窟の聖母》は、ミラノに残されていた、《ロンドン版・岩窟の聖母》を元に、アンブロジーオ兄弟や周辺のレオナルドの弟子たちによって描かれた絵画であったが、あくまでもレオナルド工房の作品という意味では、伝レオナルド・ダ・ヴィンチ作品を名乗って良いのだが、長い年月の間に、いつの間にか、レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた真作という誤情報にすり替わり、ルーブル美術館側は、真作ではないのに、レオナルド・ダ・ヴィンチ作品と信じて、現在は外部に情報発信している。

私はこのルーブル美術館側の情報は誤っている、と考えている。

何故なら、《ルーブル版・岩窟の聖母》は、デッサンが酷くて、とてもレオナルド・ダ・ヴィンチ作とは認められないレベルの作品だからだ。

2枚の岩窟の聖母の存在に関する謎は、一方の作品《ルーブル版》は、レオナルド作品では無い、という判断から出発すべきなのだ。

参考までに、再度この《ルーブル版・岩窟の聖母》のデッサンについての考察を示そう。

指摘1 《ルーブル版》の聖母に見られる貧弱なデッサン技術

《ルーブル版》の聖母の右腕は長過ぎる上、身体に接続できていない。



手と頭のサイズを比較しよう。

二本のブルー線の長さは同じだ。

試しに貴方の右手を顔に当ててみると判るはずだ。

手のひらは顔面と同じサイズだから、明らかに手が大きいのだ。

また、その右手は厳つい男の手であり、天使とのバランスが保たれていないのだ。

もとより、エンジェルは両性的に描かれるようだが、この絵画での表現の違和感拭えないのだ。

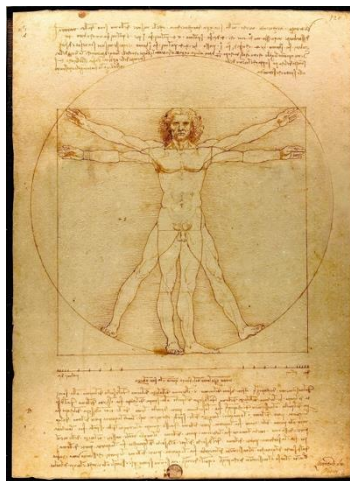
レオナルド・ダ・ヴィンチは人体の骨格と筋肉に精通していた。

その上、彼は人体図を描いていた。《ウィルトウィルス的人体図》は大変有名な彼の作品だ。彼は人体デッサンの達人でもあったのだ。

しかし、そのレオナルドが《ルーブル版》でそれほど技量の劣るスケッチを描くのだろうか？

恐らく、この絵画は最初に描かれて以来、何度も描き直されたと思われる。しかし、色彩の変化があっても、最初に描かれた形状は残っていると考えられる。

それでも、本当にレオナルドが《ルーブル版》を描いたのが真実なら、私は彼を技量の劣る画家として認識せざるを得ないだろう。



《ウィルトウィルス的人体図》 レオナルド・ダ・ヴィンチ  
人体を解剖し徹底的に研究したレオナルドが、人体各部のバランスがとれていない人体デッサンを描く事はないと考えられる。

指摘3 《ルーブル版》の天使の太ももは、どこにあるのか。



\* 《ルーブル版》の天使の足元をよく見ると右足がかなり変な位置にあることが判る。(ブルーの囲み線の中)

では、左側太ももはどこにあるのだろうか。

天使の左ひざは見えるが、左側太ももはどこなのだろう。

仮に、天使の左側太ももが、オレンジ色の衣装の後ろにあるのなら、左側太ももは天使の身体に接続していないことになる。

多分、天使の右足の画家は、アンブロジオ・デ・プレディスのアシスタントをしていたより技能の劣る人物ではないだろうか。

私は、ずばりフランチェスコ・ナポリターノと考えている。

彼はレオナルド・ダ・ヴィンチの弟子のひとりであったが、当時まだ十分な表現技術を持っていなかったのだ。

フランチェスコ・ナポリターノは、ミラノにあったサン・フランチェスコ・グランデ聖堂にあった現ロンドン版の両サイドの天使画の左側の、バランスの悪い緑の衣装の天使の画家だ。

《第一次ロンドン版》に対して、信心会から画面が暗いとの批判の後に描かれた《ルーブル版》では、画面の色調が明るいものに変更されたと考えられる。

色調の明度向上に関連して、《ルーブル版》では《第一次ロンドン版》では見えないレベルの天使の足先を、しっかり描く必要が生じたと推測される。

しかし、天使の足を描いた画家フランチェスコ・ナポリターノのデッサン技量は、たいへん劣る水準であった。

《ルーブル版》の天使の正確な形状はとても理解不能であろう。

#### 指摘5 貧弱な光表現

双方の聖母の衣類を比較したい。

光は聖母の左上側から注いでいる。

《ロンドン版》では、聖母の肩や脚部が強い光が当たっている。

しかし、《ルーブル版》では光線がないのだが、なぜなのだろうか。

《ロンドン版》の聖母は重量感があるが、《ルーブル版》には、それが無い。

《ルーブル版》の画家の光の感覚は貧弱なのだ。

しかしながら、《ルーブル版》の画家は当時の一般的なルネサンス期の画家の描画スタイルと言えるのだ。

この観点でもから、《ルーブル版》を描いた画家はレオナルド・ダ・ヴィンチ以外の画家であると私は結論づけるのだ。



ルーブル版



ロンドン版

\* ルーブル版の画家は【マリアに当たる光】を意識していない。

#### 指摘6 《ルーブル版》の中の天使の背中の奇妙なオレンジ色のバッグ

このオレンジ色のバッグは、画面中の彩度がとても高い。

多分、レオナルドは、このようなアンバランスな彩度の絵画は描かないと考えられるのだ。



《ルヴル版》

- \* 《ルヴル版》では、天使の背のアッグがあまりに彩度が高い色彩である。この色彩は画面のトーンに不釣り合いである。

指摘7 《ルヴル版》の天使の奇妙な背中の外郭線



《ルヴル版》



《ロンドン版》

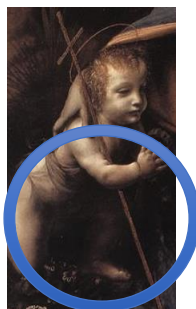
まず、《ロンドン版》の天使の背中の外郭線は素直に受け入れ可能な表現だ。しかし、《ルヴル版》の天使の背中の外郭線は不自然である。《ルヴル版》では、緑色の想定外郭線も青色のそれも共に奇妙なのだ。

指摘8 《ルヴル版》では、子どものイエスが草地に浮揚しているように表現されている。





《ルーブル版》



《ロンドン版》

2枚の絵画を詳細に比較するなら、特に子どもの描画に着目すると、《ルーブル版》の子どもイエスは草地の上に浮遊しているように描かれている。

一方の《ロンドン版》の幼児洗礼者ヨセフは、聖母附近の地面にしっかり着地しているように描かれている。

指摘9 《ルーブル版》の聖母の腰ベルトは技術の劣る画家によって描かれている。表現が奇妙だ。



《ルーブル版》



《ロンドン版》

たぶん、これは誰もが容易に気付く特徴であろう。

ほぼ誰もが、《ルーブル版》の表現を腰の巻きベルトであるとは気付かないだろう。ベルトが聖母の体に巻き付いていないのだ。

以上のような観点でご理解いただけると考えるが、《ルーブル版・岩窟の聖母》の画家のデッサン力は、《ロンドン版・岩窟の聖母》を描いたレオナルド・ダ・ヴィンチと比べ、かなり劣っているのだ。

謎解きの第一歩として、双方の《岩窟の聖母》をレオナルド・ダ・ヴィンチ作と考えるなら、その時点で、比較考察は破綻しているのだ。